

「お笑い」は世界を変えられるのか

細江美月・野口 萌

ライブハウスは明るい笑い声に包まれている。舞台上にいるのは音楽を奏でるバンドではなく、お笑い芸人だ。彼らはショートコントや漫才で会場を沸かせている。観客は若い女性が多い。「お笑いは嫌なことを忘れさせてくれる。好きな芸人を生で見て、実際にコミュニケーションが取れることが嬉しい」と彼女たちは言う。

たかまつななさんは、屈託のない笑顔と礼儀正しさが印象的な 20 歳の女子大生芸人だ。2013 年 12 月某日、20 歳以下のお笑い芸人の大会で優勝し、現在テレビに引っ張りだこである。名門女子高出身で、その学歴を生かして「お嬢様キャラ」を売りにして活動している。

「お笑いは短所を長所にしてくれます。」そう話す彼女はしつけの厳しい家庭で育ったため、子供の頃テレビをほとんど見ることはなく、同年代の子供たちが好きな芸能人を全く知らなかった。自分が「お嬢様」で世間知らずであることに疎外感を抱いていたという。しかし、その無知をあえてネタにすることでコンプレックスが笑いに変わる。それがお笑いの魅力だという。

彼女の夢はお笑いで社会問題を提起することだ。哲学者中沢真一氏と芸人太田光氏の対談本「憲法第九条を世界遺産に」を読んでお笑いの新しい可能性に気付いたという。本書で太田氏は、平和について熱く語り、政治的発言を多くしている。最初たかまつさんは太田氏がお笑い芸人だとは思わなかったそうだ。

たかまつさんは幼少期から環境問題や平和などについて関心が高く、読売新聞の子供記者や第 14 代高校生平和大使として国連軍縮会議でスピーチするなどの活動を行っていた。しかし、彼女の記事やスピーチに対して反響があったのはもともとそれらの諸問題に関心がある層のみだった。そこで、これから社会を変えていく役割を担う同世代の若者たちにもっと社会問題に関心を持ってほしいと考えた。

「お笑いを通じてなら、楽しく社会問題を知ることが出来ます。」彼女は山でお笑いライブを行い、登山マナーを喚起する「山頂ライブ」や、法律をもっと知ってもらうために童話に法解釈を取り入れたフリップ芸なども行っている。

お笑い芸人としての活動と学業との両立は難しく、辛いことも多い。移動中の電車や楽屋では、レポートの執筆に追われている。一時は退学してお笑いに専念することも考えた。しかし、大学での授業や出会いが実はネタ作りにつながっていることに気が付いた。教授からネタに対してアドバイスをもらうこともあるという。

「お笑い」と「社会問題」は一見全くつながりのないように思える。しかし、お笑いは人々が楽しく社会問題を知るきっかけになる。「人々が関心や問題意識を持つことで自分に何が出来るのか楽しみながら考えられたらいいですね。」そう語る彼女の表情には、静かな闘志と確かな覚悟が見て取れた。10 年後あるいは 20 年後には、世界がお笑いの力によって変わっているかもしれない。

取材の楽しさは、自分の知らない世界について知ることができるツールになることからその魅力を実感しました。インタビュー対象者や自分たちの思いを言葉にするのはまだまだ不慣れですが、これから取材にどんどん出かけて心のこもった何かを伝えられたらと思います。

野口 萌

私はお笑いが大好きです。お笑い番組を見て笑っていると沈んだ気持ちも吹き飛びます。今回記事を書くにあたって実際にお笑いライブを見る機会に恵まれ、よりお笑いの良さを知ることができました。たかまつななさんの言うように人々に幸せを与える笑いの力は世界を変えることが出来るのではないかと思います。

細江 美月